重要文化的景観

長崎市外海の石積集落景観

【出津・牧野地区】

【赤首・大野地区】

Landscape with Terraces Retained by Stonework of

SOTOME

重要文化的景観

長崎市外海の石積集落景観

Landscape with Terraces Retained by Stonework of SOTOME／Value

文化的景観の価値

「外海の風土と生活のなかで成立し発展した多様な石積み文化」

～価値を構成する3つの柱～

1　自然的特性にもとづく石積み文化
2　多様に展開する石積みとその技術的特徴
3　生業や歴史と密接に関連した石積み文化の変遷過程

文化的景観とは…地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの。
（文化財保護法第2条第1項第5号より）

Landscape with Terraces Retained by Stonework of SOTOME／Scenery

自然と共生し人々が創りあげた石積み風景

外海の石積集落景観は、地域の人々が暮らしていく中で生まれた景観です。17世紀はじめにサツマイモの栽培が普及すると、人々は生活するために山頂まで土地を切り開き、その際出土する結晶片岩を用いて、畑や屋敷の石垣、海の波や風を防ぐ石築地、屋敷の境界を示す石塀、住居や納屋の石壁（ネリベイ）の4種類の石積み構造物を築きました。この集落景観は、1862年の絵図にも描かれており、その様子は江戸時代から現在も継承されています。

石壁には、赤土にわらすさを混ぜたものを用いて結晶片岩を垂直に積み上げる当地域の伝統的な「ネリベイ」と、外海地域に赴任したパリ外国宣教会のマルク・マリー・ド・ロ神父によって導入された、わらすさに代わり赤土に石灰を混ぜる「ド・ロ壁」の2種類があり、この地域固有の石積集落景観を形成しています。この景観が、結晶片岩を主とする地質が特徴の地において、数多くの石積み構造物を築きつつ畑作を営んできた、この地域に特有の土地利用形態を示すことから、外海の出津・牧野地区は、平成24年（2012）9月19日に国の文化財である重要文化的景観に選定されています。

また、出津・牧野地区との社会的関係性が強い、北西に隣接する赤首・大野地区については、調査により4種類の石積み構造物が確認でき、結晶片岩や玄武岩を用いた石積み構造物を数多く築き、近世からサツマイモ栽培による畑作を営んできた石積み形成の背景や土地利用形態を示す石積み文化の類似性が確認できました。加えて、赤首地区では風呂・かまど等の付属屋といったかつての外海地域の生活様式が色濃く残り、大野地区では大野岳付近で産出される玄武岩を生かした石積み構造物が見られ、石積み文化の多様性も示すことから、平成30年（2018）2月13日に重要文化的景観に追加選定されました。

なお、外海の石積集落景観の範囲は、世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産である外海の出津集落と大野集落を含んでおり、石積み風景からは、キリスト教が禁じられた禁教時代の集落の様相が見て取れます。

【結晶片岩と玄武岩】

外海地域の地質は、結晶片岩という変成岩の一種で構成されています。

この石は斜面を開墾した際に数多く出土し、やわらかく平らで加工しやすい性質を持つことから、急峻な地形で暮らしていくための田畑や宅地の石垣、水路や護岸の石積みのほか、住まいや墓など、生活に密着する多種多様な石積みが地域の人々によって築かれてきました。

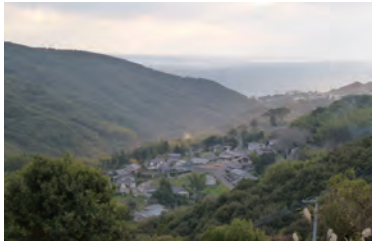
また、赤首・大野地区では、玄武岩という火成岩の一種が多く産出され、石積みに利用されました。

結晶片岩

玄武岩

急峻な地形がもたらす石積み文化

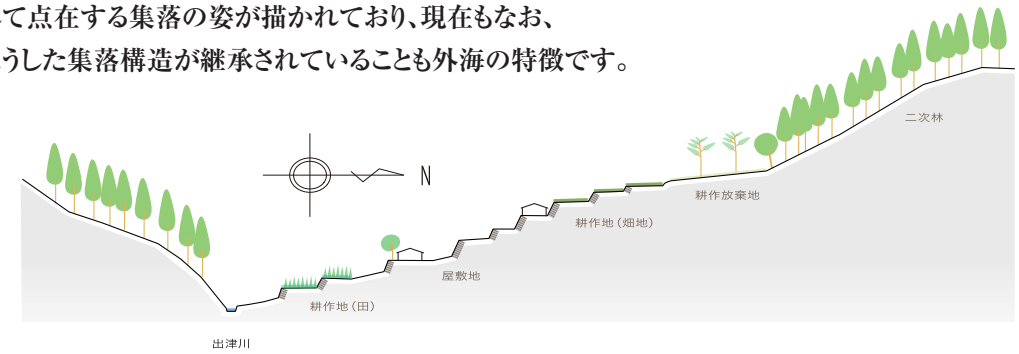
出津・牧野地区



出津川上流から海岸部を望む集落景観
左岸は急斜面、右岸は緩斜面（牧野地区下里集落）

外海地域は角力（すもう）灘に面した西彼杵半島の中心部に位置しており、出津・牧野地区は標高400 m 内外の起伏のある山地の間を流れる出津川によって作られた谷地形が発達しています。

海岸付近は急傾斜の断崖が多く、平地はごくわずかであるため、集落は1カ所にまとまっておらず、河川流域部のわずかな平地や、北西の季節風を避け、水脈に沿ってつくられた斜面地などに点在しています。幕末に作られた絵図には、住居や畑地、墓地などをひとつの単位として点在する集落の姿が描かれており、現在もなお、こうした集落構造が継承されていることも外海の特徴です。



赤首・大野地区

海岸から断崖状にせり上がった地形と南北に細長い
区画の土地利用（大野地区カド集落）

赤首・大野地区は、海岸から断崖状にせり上がった地形及び海に面した地滑り地形の斜面地に、小規模な居住地及び畑地が点在しています。変岳及び大野岳から角力灘に面した斜面地に広がり、「出津・牧野地区」と同様、17世紀後半からの人口増加によるサツマイモ栽培の拡大に伴って斜面地の開墾が進みました。等高線に沿った南北に細長い区画の土地利用を基本とし、北西の季節風を避けるため、家屋は南北方向に軒を向けています。

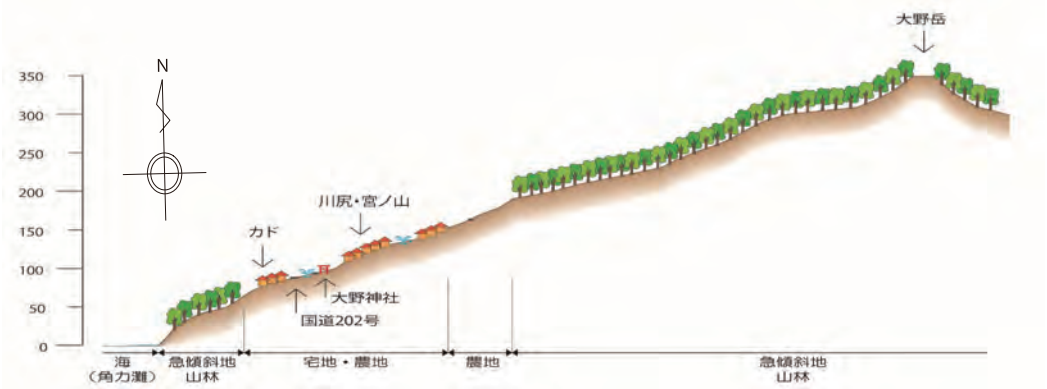
【赤首地区】　～結晶片岩を用いた石積みと、かつての集落特性を留める石積み文化の類似性～

赤首地区は、大村藩下出津代官所の直轄地である黒崎村に属し、一部が佐賀藩深堀領の飛び地でした。宝暦2年（1752）の絵図には草葺きの家屋と畑地が描かれています。家屋の屋根が草葺きから瓦葺きに建て替えられていったことに伴い、構造が石壁（ネリベイ）から木造軸組との混合構造へと変遷していった様子が現存建物から確認できます。また、出津・牧野地区と同様な地質から結晶片岩による石積みを築き、かつての外海地域で広く見られたネリベイによる風呂・かまど等の付属屋が残っています。

【大野地区】　～地質構造による外海の石積み文化の多様性～

大野地区は、寛文元年（1661）に大村藩の家臣の知行地となり、神浦村の人口増加に伴い開発が行われました。17世紀中ごろの絵図で、現在も同様に点在する小規模な集落を確認できます。結晶片岩の石積みに加え、大野岳付近で産出される玄武岩による石積み構造物が確認でき、明治26年（1893）に建設された大野教会堂の「ド・ロ壁」にも玄武岩が使用されています。

結晶片岩と玄武岩の地層境界部には湧水点が多いため、小字集落ごとにカワと呼ばれる水場が石積みで設けられ特徴的な景観を成しています。カワは用途ごとに3段に分かれた桝を設け、飲料水、野菜などの洗い場、洗濯や畑の水などに段階的かつ効率的に利用されています。



Landscape with Terraces Retained by Stonework of SOTOME ／ Technique

江戸時代から培われた高い石積み技術 伝統技術と西洋技術の融合

石積みは、構造的に「石垣」、「石築地（いしついじ）」、「石塀」、「石壁」の4つに分類されます。外海地域ではこれら4つの構造物のすべてを同じ手法で築くという特有の技術が発達しました。

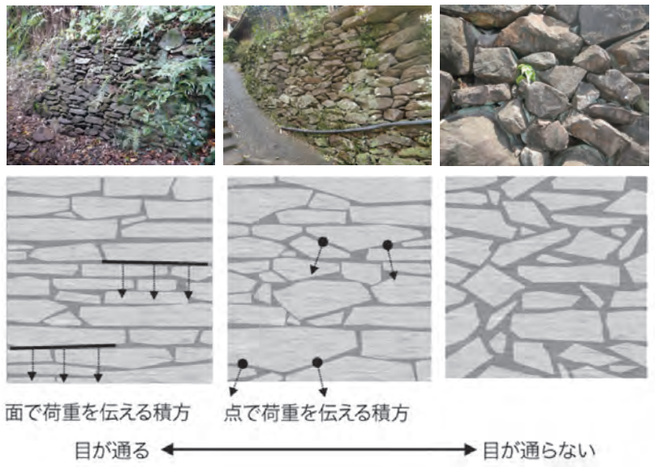
結晶片岩に赤土と藁すさを練り込んで築いた伝統的な石壁である「ネリベイ」のほか、明治期にはド・ロ神父によって、藁すさに代わり赤土に石灰を混ぜる練積みの石垣である「ド・ロ壁」が導入され、現在もこうした石積み構造物を数多く見ることができます。

【積み方の種類】

外海の石積みの積み方には、築石面の目が水平に通る布積み（布積みくずし）のほか、築石面の目が通らない乱積みや、落とし積み（谷積み・矢羽積み）などがあります。

また、外海の石積みの特徴として、石垣の下部に大石を縦向きに置く立石積みも見られます。

布積み　布積みくずし　乱積み



落とし積み（矢羽積み）

特に水辺の石積み技術として定着

立石積み

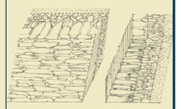
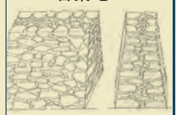
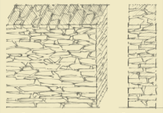
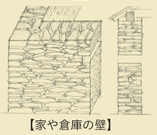
段畑の石垣に多用される

Landscape with Terraces Retained by Stonework of SOTOME ／ History

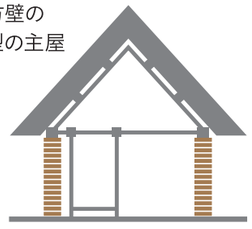
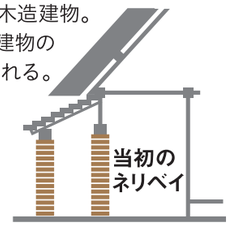
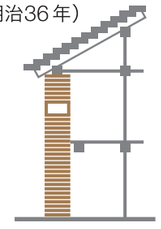
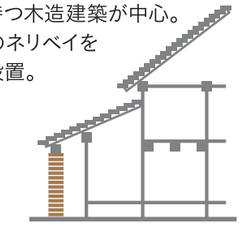
石積みに刻まれた外海の暮らしと時間

集落の至る所で見られる石積みの特徴は、歴史や生活様式の変化とともに、「形成期」、「発展期」、「大成期」、「復活期」の大きく4つの時代に分類されます。
生活を営むために必要な石積みは、特定の石工職人の手によってのみ築かれるものではなく、ここに住み、暮らしてきた外海の人々の手によって築かれてきたものです。

●外海石積文化の変遷

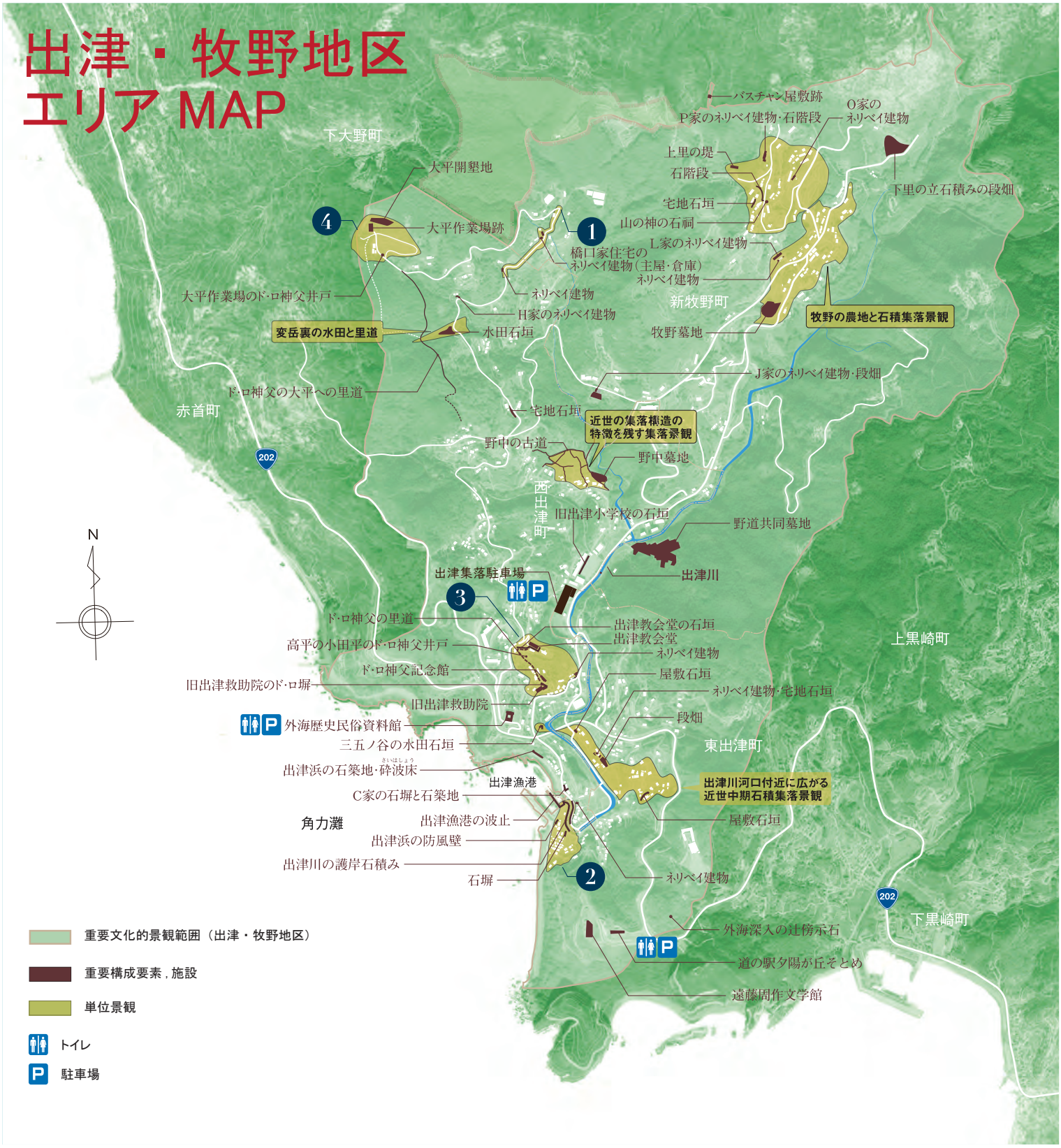
	第１期	第２期	第３期	第４期
	石積文化の形成期	外海独自の石積文化の発展期	民衆石積文化の大成期	石積文化の衰退と復活期
特徴	民衆による石積技術が完成される （西彼杵半島一帯に共通する石積文化）	ド・ロ神父による独自の石積技術の展開が見られる （外海固有の石積文化形成）	新たな産業による地域の活性化を背景とした 在来技術の進展 （一部にド・ロ神父時代の技術の名残）	石積遺構・石積景観の価値が 再認識されはじめる時期
時代	江戸	明治　大正	昭和	平成
石積文化の変遷	環東シナ海地域の石積文化の影響 サツマイモ栽培開始、本格的な農地の開墾 ■宝暦・文久各種絵図に石積みが描かれる	ド・ロ神父による西洋石積文化との融合 相互に影響 ●従来の石積文化を主とする流れ ●ド・ロ神父独自の石積技術の展開 ■風景画・古写真に残された石積景観	農地開墾のピーク　池島炭鉱の開坑 ●第２期の影響を受けた新たな民衆石積文化展開	農業の衰退（担い手の流出） ●新たに石積みが築かれることが少なくなる ●石積遺構の文化財指定 ●農地の活用に伴う石積景観価値の再認識 石積文化の価値の転換
構造形式別石積文化の変遷：石垣  【階段状の田畑や宅地】	 ●高平の屋敷石垣 ●三五ノ谷の水田石垣 特徴：算木崩しの隅角部と緩やかな反りを持つ石垣技術	 ●野道共同墓地 特徴：隅角の大きな反り	 ●牧野の曲面石垣 特徴：曲面と大きな反り	 ●旧出津小学校の石垣 特徴：近年（昭和期）に築かれた最後の長大な石積
石築地  【海の波や風を防ぐ】	 ●出津浜の石築地 特徴：海岸で採取される玉石を斜めに並べて積んだ石築地		 ●出津浜の防風壁 特徴：海岸で採取される玉石を斜めに並べて積んだ石築地	
石塀  【宅地の境界を示す】		 ●旧出津救助院のド・ロ塀 特徴：石灰を混ぜた接合材により石塀を構築	 ●C家の石塀 特徴：海岸で採取される玉石を積んだ石塀	
石壁  【家や倉庫の壁】	 ●J家のネリベイ建物 ●H家のネリベイ建物 特徴：四方石壁の、閉鎖的な空間であるネリベイ建物が主流	 ●大平作業場跡 ●橋口家住宅 特徴：ド・ロ神父主導により築造された西洋的石壁技術	 ●O家のネリベイ建物 ●P家のネリベイ建物 特徴：石壁が主要構造部から下屋支えとして多用されるようになる。	 ●L家のネリベイ建物 特徴：主屋からネリベイが消失し、付属屋に使用する傾向となる。

●ネリベイ建物の変遷

時代	江戸～明治中期	明治中期～大正		大正～昭和期
屋根葺材	草葺き屋根	瓦が普及し始める		瓦葺きが一般化
構造と変遷	四方壁	下屋が発生	建物規模が拡大	木造の軸組が普及
ネリベイ建物	四方壁の 小型の主屋  【J 家のネリベイ建物】	下屋をもつ木造建物。 ネリベイは建物の 一部に使われる。  【H 家のネリベイ建物】	橋口家住宅 倉庫（明治36年） ド・ロ壁を使用した 2階建ての ネリベイ建物。  【橋口家住宅】	下屋を持つ木造建築が中心。 衝立状のネリベイを 新たに設置。  【P 家のネリベイ建物】

ド・ロ神父とは >>　フランス人宣教師マルク・マリー・ド・ロ神父　1879年に外海地域の主任司祭として赴任。宣教だけではなく、産業・社会福祉・土木・建築・医療・農業・教育文化といった活動に奉仕し、外海の地で生きるための知恵を授けました。

出津・牧野地区 エリア MAP



橋口家一帯と沿道景観

【重要構成要素・単位景観】

重要文化的景観の範囲内には、石垣やネリベイ建物など、文化的景観の本質的な価値を示す要素＝「重要構成要素」、文化的景観の価値を特徴的にあらわす景観としてのまとまり＝「単位景観」があります。

出津浜口の港湾石積集落景観

明治期のカトリック施設群とその一帯に広がる集落景観

大平作業場と明治期の開拓地に広がる農地景観

赤首・大野地区 エリア MAP

赤首地区集落

塩谷河内のネリベイ建物と宅地石垣

暗渠水路の石積み

ネリベイによるかまどの付属屋

赤首祈禱所跡の石垣

大野地区集落

大野神社と境内石垣

辻神社

大野教会堂と境内石垣

門神社

庄屋屋敷跡の石垣と水場（カワ）

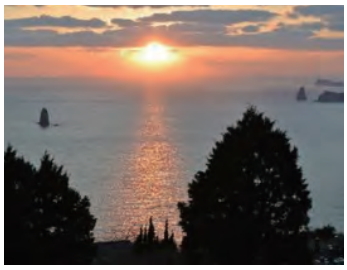
辻集落の石階段

長崎市外海の石積集落景観エンブレム

石積で造られたネリベイ（石壁）家屋の窓から見える、急斜面の地形と角力灘といった長崎市外海の景観の特徴を表現し、色は結晶片岩の色見をイメージし赤褐色としました。

石積建物

斜面地形



角力灘の夕陽

長崎市外海の石積集落景観　回遊コース

回遊コース１　明治期のカトリック施設群とその一帯に広がる集落景観
回遊コース２　出津川河口の港湾石積みと江戸時代からの石積み
回遊コース３　牧野の農地と石積み
回遊コース４　地質の違いによる石積集落景観
回遊コース５　近世の集落構造の特徴を表す集落景観

※回遊マップは、長崎市ＨＰに掲載しています →

長崎市 HP

長崎市 文化観光部　世界遺産室

〒850 - 8685　長崎市魚の町 4-1　14F
TEL 095-829-1260
E-mail　sekaiisan@city.nagasaki.lg.jp